

ストレスに弱く免疫能も低下しやすい高齢者は、がんになりやすいという。長く診ている患者さんも高齢になって、検診などでがんが見付かったことも多い。

80歳のNさん。高血圧と脳梗塞で通院中の患者さんだ。診察のたびに、「認知症」だけはなりたくない。センセ、頼みますぞ「が口癖の元気な人だ。が、今日は「胃カメラをしたら、がんが見付かった。手術」と、口数も少ない。早期の胃がんらしいが、あまのしけんぼのしているの、べ、そのまま放ってはおけない。

「今いき、がんで早期なら、イホみたいなものか？それなら、がんになった人は認知症にならなくとも言われている」と、医者、まずは患者さんを慰めねばなるまい。

実は、ワッシーも正しい知識を絞りだしている。確か、最近読んだものの中に、「認知症で一番多いアルツハイマー病とがんの発症には逆の相関がみられる」という記載があったはずだ。具体的には、がんの患者さんがアルツハイマー病を発症するリスクは、同年代の健常人と比べると15%減少するという。逆に、アルツハイマー病の患者さんががんを発症するリスクは、40%減少するといわれる。

もっとも、がんといっても色々ながんがあり、胃がんやすい臓がんなどでは関係が明らか。で、肺がんや前立腺がんなどでは関係が薄いようである。

と聞いて、Nさんも少しは気が楽になったか、いつもより高い血圧も下がった。が、これからも十分な血圧の管理と脳梗塞の再発予防は欠かせない。実は、Nさんは、脳血管性の認知症のリスクがある。また、もしアルツハイマー病にでもなったら、症状の進行も早いだろう。そうだ。「がんなんかこわくない」とは言うまい。が、ホントは、脳血管のほつがこわいのだ。でも、今日はもう何も言わない。

(石黒修三＝いしほろくにニック・脳神経

外科医：10/10 北國新聞掲載)